

本号の主な内容

【事務局より】

【Dr.伊藤のすこやかコラム：最終回にあたって：伊藤淳】

【リレーコラム/謝恩会で思ったこと：岩田 昇】

【研究代表者より：島津明人】

---

【事務局より】

平素は「東京大学ワーク・ライフ・バランスと健康に関する調査」にご協力いただき誠にありがとうございます。事務局の時田です。

天気予報では気温20度近くを予報する日も目立ってきました。桜は既に満開です。すっかり春になり、気持ちもよいです。とはいえ、まだまだ寒くなる日もあるかと思いますので、体調管理には気をつけたいと思います。

皆様からご回答いただきました貴重なデータの集計が終わり、報告書として発送を致しました。既にお手元に届きましたでしょうか(未だお手元に届いていない場合は、お手数ですが事務局までご連絡いただけますと幸いです)。

今回のメルマガは、Dr.伊藤のすこやかコラム“最終回にあたって”、リレーコラムは“謝恩会で思ったこと”をお届けいたします。また、研究代表者 島津明人からごあいさつを掲載させていただきました。

突然ではございますが、今まで毎月配信をしていました、【東京大学「ワーク・ライフ・バランスと健康に関する調査」メールマガジン】は、諸般の事情により今後は不定期の配信とさせていただきますこととなりました。読書の方々には、大変申し訳ございませんが、何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

---

【Dr. 伊藤のすこやかコラム：最終回にあたって】 伊藤 淳

先日、知り合いのママから生後8か月の女の子の相談を受けました。

そのお子さんは、首がすわって寝返りはしますがお座りが安定せず、ハイハイもしないので寝ころんで遊ぶか、抱っこが大好き。離乳食は嫌がって食べてくれず母乳中心の生活が続いている。一方で体重と身長はスクスク伸びていて、ニコニコ笑顔が可愛い女の子。ママ友の間では、早くもつかまり立ちをしたとか、離乳食が3回になったという話が聞かれ、自分の子と周囲の子のできることのギャップに悩んでいるとのことでした。

医学的には確かに発達の遅れをギリギリ指摘できる状況ですので、小児科医として医療機関受診を勧めるところではありますが、乳児健診が間もなくあるとのことだったのでまずは健診に行き、必要に応じて医療機関を紹介してもらうのがいい流れではないか、とお伝えしました。対応としてはそれでいいの

ですが、問題はママの不安がどこまでも深く、「もしこの子が障害児だったらどうしよう」という考えが頭から離れない状態におちいつていることでした。

子どもの発達の遅れを気にしたり、実際に障害があると診断されてショックを受けている親御さん達とのお付き合いの中で、自分が必ず伝えようと思っていることがあります。

それは、発達に遅れのあるお子さん達が、誰かや何かを「害してる」事は決してなく、そういう意味で「障害」という表現そのものがイメージ的に誤解を与えているよね、ということです。

人間の発達の要素には「運動能力」「言語能力」「社会性」「情緒」などいくつかの要素に分けてみることで、それぞれの発達のスピードには個人差があります。全体的に早いお子さんがいる一方で、ゆっくりマイペースなお子さんもいます。また、それぞれの要素が必ずしも同じスピードで伸びていく訳ではありません。そして極端に遅い場合には医療と福祉がサポートに入りますが、健常者の中でも診断のつかない微妙な例が数多くあり、グレーゾーンと呼ばれます。さらに、どこまで行けばグレーでなくなるという線引きもありません。

周囲を見回してみても、健常者（と思われている人）の中にも「あの人はスポーツ万能だけどしゃべらせたら全然だね」とか、「仕事はできる方だけど、けっこう空気読めないよね」ということはあると思います。理解のために極端に言えば、これだってグレーゾーンです。誰であれ何かしらの困難さ、得意不得意は抱えているわけで、それを受け入れての自分であり、全部ひっくるめてのあなた、であるわけです。言い換えれば、個性です。

障害という言葉嫌って、「障碍」という表記を使う専門家もいます。障碍児への教育は、基本的には一人一人の子どもの得意不得意を見極めて、どう向き合うのが一番かを考えながらプランを組まれていることになっています。これを特別支援教育と呼んでいます。「一人一人の個性に合わせた教育」って、全ての子どもに対して言える教育の理想です。それが特別な事であってはいけなはずです。特別支援教育で行われていることが、全児童生徒対象に広く行われるようになれば、それはもう「特別」ではありません。

ハンディキャップを持つ人たちを「障害者」という言葉で特別視しているうちは、その社会はまだまだ未成熟なんじゃないかな、いろんなタイプのハンディキャップをすべて個性として考えて、互いに助けあえる社会なら、誰もが生きやすくなるのにね、と思います。

相談に来られたママには、こう伝えました。「もし障害があると診断されたとして、それは悲しむことではありません。お子さんの個性として考え、この子のよりよい育ちを支えていくのが、親であるあなたと、周囲の大人たちの役目です。それは、障害がなかったとしても同じことです。この子の笑顔は将来を悲観していません。ママも早く前を向いて、子育てを楽しんでください。」

伊藤淳(小児科医)

---

#### 【リレーコラム：謝恩会で思ったこと】 広島国際大学 岩田 昇 (臨床心理学科長)

---

先日、謝恩会があった。卒業式の晩の恒例行事。現所属ではこれで10回目。もう30年も昔だが、我々が学生だった頃も、寿司などを取って大学内で地味にやった記憶がある。

今ではわざわざホテルで開催する。それにお車代や記念品まで付けたりする卒業生たちには結構な出費になるだろうに。

謝恩会の最大のメニューは各ゼミで趣向を凝らした卒業アルバム(スライド)紹介で、卒業生たちは懐かしさに浸り盛り上がる。

で、そんな気分の中で、ゼミに関係なくいろんな教員のところを周って、涙ぐみながらのあいさつなどがあるのが例年のことだった。

それが、今年はそういうシーンがほぼなかった。例年のように立食パーティだったが、ほとんどの学生たちは飲み物カウンター周辺で、仲のいいいつものメンバーといつもの飲みホ(飲み放題)でのようにはしゃいでいた。

今の若者たちの交友関係の特徴の一つで、快原理に則って表面的に気の合う同年代の友人たちだけと人間関係を形成するという『イツメン』だ。優等賞を取った学生など、ごく一部を除いては、皆イツメンと大騒ぎしていた。男女とも。

最後の花束贈呈でステージに並んだ際、6歳上の学部長と言葉を交わした。

『心理を学んでいるはずなのに、今年は何か変ですねえ』

『何だか、ドライというのか何なのか…。こういう会で少しウェットな感慨に浸るなんていうのはもう今の学生たちの価値観にはないのかなあ?』

『謝恩会の意味が分かっていないのかもしれないなあ?』

学部長は謝恩会開始の前にゼミ生に二次会の予定を聞いたらしい。すると『先生、二次会に行きたいですか?』と逆に聞き返され、あまりに想定外の応答にガックリきたと云っていた。

二次会が計画されているのは、それとなく耳に入っていた。しかし、それは卒業生たちだけの二次会だった。従来あったゼミ単位での教員も交えた二次会は結局どこのゼミでもなかった。昨日の会議で会った教務部長(診療x線学科教授)も『うちは教員からの一言もなかったよ~』と苦笑いをしてた。

いつの時代も、教員と生徒・学生との間には温度差やギャップがあるものだ。学生にあまり期待し過ぎては、教員の身が持たない。教育とはそういうものなんだろうと思う。

卒業生たちがお金を出し合って催している会なんだから卒業生たちが楽しい時間を過ごすのは当然いい。そのこと自体は、我々教員も嬉しく見ている。内心(アホか!)はともかく。

しかし・・・,

来年は『謝恩会』ではなくて、『卒業祝賀会』に変更するよう勧めるべきかなと、今から真剣に悩んでいる。

広島国際大学 岩田 昇(臨床心理学科長)

---

【研究代表者より】 島津 明人

---

3月も最終日となりました。

明日からいよいよ4月に入り、進級されるお子様だけでなく、小学校に進学されるお子様も、いらっしゃると思います。これからの新しい生活に、期待と不安でいっぱいの子どもたちでしょうか。

さて、今年度の「ワーク・ライフ・バランスと健康」調査ですが、調査を実施した2つの区から合計240世帯の方にご回答いただきました。調査にご協力いただいたみなさまに、心より御礼申し上げます。みなさまのお手元には、調査結果とともに謝礼品が届いていることと思います。もし、調査結果、謝礼品がお手元に届いていない場合には、大変お手数ですが事務局([wlb-project@umin.ac.jp](mailto:wlb-project@umin.ac.jp))までご一報い

